丹波新地域ビジョンの構成案

Ⅰ　はじめに－ビジョンの役割・性格－

・30 年後に向けた**「ビジョン」**であるとともに**「シナリオ」**
　－『参画と協働』の「ビジョン」から発展し、**『共感・共進化・共創』**の「シナリオ」へ
・**地域の強み**を活かし、伸ばす、ポジティブ志向の「ビジョン」に
・地域の風土・伝統に立脚しながらも、時代の変化に柔軟に対応し、新しい革新的な取組を生み出していく**『挑戦・成長』**する「ビジョン」へ
・**挑戦的な目標（ムーンショット）**を掲げる「ビジョン」－そこから遡って（バック・キャスティングして）、近未来（ポストコロナ社会）、現在になすべきことを考える
・人と自然（生き物）の共生、人（感性）と技術の調和をめざす、**『人×自然×技術』**の「ビジョン」

Ⅱ　わたしたちの丹波－風土・文化、ポテンシャル

・典型的な多自然地域ながらも、多彩な固有の魅力を放つ地。それが丹波
　－共　生 ： 身近な里山での自然とのふれあい、稀少種を含む多種多様な生き物
　－豊　穣 ： 盆地特有の気候と肥沃な土壌から生まれる特産品の数々
　－伝　統 ： 古からの文化・文物が脈々と受け継がれてきた地、日本遺産、創造都市
　－交　流 ： 山陰道・京街道の要衝としての歴史、半世紀に及ぶ都市農村交流の歴史
　－地　勢 ： 生物が行き交う水分かれ回廊、篠山層群（恐竜化石）
　－気　質 ： 温厚な人々、寛容性に富んだ風土

Ⅲ　丹波の森づくりのこれまでとこれから－継承と発展、伝統と革新－

・丹波の森づくり 30 有余年、地域ビジョン 20 年の営為（レガシー）を次世代に引き継ぐ
　－理念の継承：先導的であった丹波の森づくりの理念は今や普遍的なものに
　　SDGs の考え方と軌を一に
　－理念の再確認・再解釈：『森』 ＝ まち、集落、田園、森林を含む空間全域
　　『もりびと』 ＝ 伝統を守りながらも未来社会を切り拓く能動的人材
　　※『ふるさと丹波のかけがえのない美しい自然はもちろん、暮らしやなりわい、地域内外の人々との交流、生活空間、生活文化など、私たちを取り巻くすべての環境を「丹波の森」と考え、より良い地域づくりに取り組んできました。』（地域ビジョン）
　－取組の成果検証：里山づくり、環境教育、景観形成、文化振興、人材育成 等々
　－仕組み、取組の発展的継承：人的資本、ソーシャル・キャピタルを重視
　－取組のなかで再発見された価値（魅力）の発信
　　「寛容性」：全ての人を温かく包み込む、開かれた地丹波（→関係人口拡大、グローバル化対応）
　　「循環性」：資源、ものが循環し、社会、経済も回る最適化社会丹波（→環境負荷低減、自給率向上、持続可能な経済構築）
　　「可能性」：多様な機会と選択肢に恵まれた、約束の地丹波（→イノベーション促進、起業拡大）
　　「固有性」：ここでしか体験できない、味わえない丹波ならではの魅力（→グローバルニッチ、オンリーワンの魅力創出・発信）
　　「普遍性」：世界に伝播する丹波スタイル（→技術を活かした、自然の中の新しい暮らしのかたち）
　－丹波の森づくり第Ⅱ章を宣言：『3つの環』を再評価しつつ、環境、社会、経済の統合的向上・発展に向け、時代潮流に即した新たな取組を柔　軟に進めていく必要性を提起
　　『人を創り、森を（守り）活かし、生業を興す（価値を生み出す）ことで、丹波を創生』
　　『主体形成⇔資源活用⇔価値（所得・雇用）創出を一体的に推進』
　　※『丹波のいのち（＝自然）、ひと（＝人間）、なりわい（＝産業）の３つの環をはぐくむ（「守り」「育て」「活かす」』（丹波地域ビジョン）

資料３－１

Ⅳ　2050年の丹波を描く－望ましい地域の姿－

1．2050年に向けた環境変化

・地球環境問題の深刻化－環境負荷をかけない社会発展、QOL 向上の途を探る
・長期的な人口減少－人手をかけずとも可能な地域経営の在り方を考える
　　－人口数よりも地域活動総量の拡大を重視（人の交流、情報、モノの流通促進）
・Society5.0 の到来－AI と人間の棲み分け、ロボットと人の協働を図りながら、人間らしさ（自分らしさ）を追求（創造的活動への傾斜）
　　－人間は現実、仮想双方の空間を行き来きしながら活動（アバター（分身）の操作・活用）

2．2050年の地域社会－空間像、社会像、人間像－

（1）空間像〔例〕

・エコ･ハビタットの創生－森に憩い、森で暮す（働く）「もりびと」たちのコロニー・コミューン形成
・生業・生産の場（資源、エネルギー源）としての森の再生・復活が実現－木質バイオマスによるエネルギー自給率 100%達成
・集落をまるごとテーマ・コミュニティ（趣味人特区）に転換（「（住まないで）働く（遊ぶ）集落」の出現）
・まちのそこかしこが、リノベーションにより、サードプレイス－オフィスや創造的活動拠点、交流拠点（創造的界隈）－に変身
・空の移動革命が現実に－丹波の空を eVTOL（電動垂直離陸機）が飛び交い、いつでも、どこでも行きたいところに行ける時代に

（2）社会経済像〔例〕

・新農本主義（農(森)を中心とした暮らし、経済、社会）の台頭
・MORITEC（森、農、食、コミュニティ×DX）による新しいビジネス・サービスの創造－「地産地創」「地創地産」の実践（人造肉、陸上養殖等）
・生産・サービス活動、空間管理の無人化、省力化、自動化の達成（無人農業、ロボット介護等）
・シェアリング・エコノミーによる新しい循環型経済の成立－社会ストック、人材の共有化、デジタル通貨が地域の主軸通貨に
・関係人口を巻き込んだ「仮想コミュニティ」が担い手の源泉となり、地域自治・経営の基盤に

（3）人間像〔例〕

・自然と共生する暮らし、農のある暮らし、食の豊かさを享受できる暮らしが基本に
・多種多様な（有償・無償の）しごとの組み合わせにより自らのライフスタイルを演出
・シビックテックを駆使し、価値創造に挑むイノベーターとしての市民（もりびと）輩出
・多国籍チームによる地域課題の解決－世界の叡智を丹波に結集（丹波の森大学のグローバル化推進）
・自然環境リテラシーと科学リテラシーの双方を高める教育の実践によって、感性と知性のバランスのとれた人材を育成
・100 歳超のシニアが AI、ロボットの助けを借りて現場の第一線で現役として活躍

⇒将来の姿をストーリーとして叙述
⇒ストーリーに沿って、数値目標(KPI)を設定（ゼロ・カーボン、食料・エネルギー自給率 100%、健康寿命 100 歳超 等々）

Ⅴ　将来像実現に向けたシナリオ・方向性（今後検討）

・分野・項目毎に取組の展開方向（10 年間）→シンボル・プロジェクト（5 年間）を記載

Ⅵ　推進の体制・枠組（今後検討）

・推進の仕組みとして、異質なアクターで構成されるゆるやかなネットワークを構築